

下田市 SURF CITY 構想 [案]



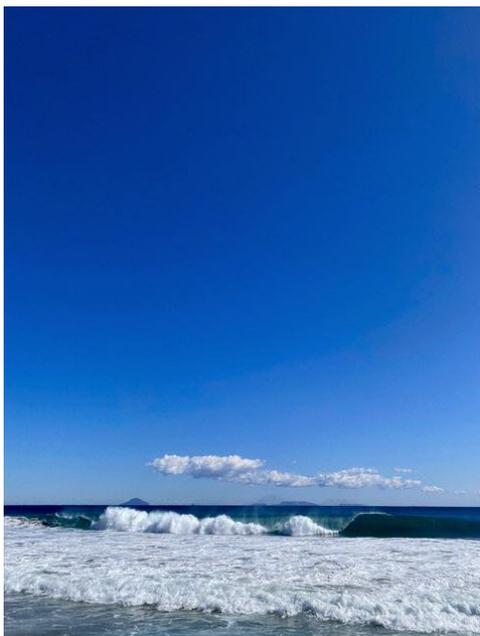
下田市サーフタウン構想策定委員会

INDEX

1. 構想づくりの背景	
1) 下田市とサーフィンの関係	1-2
2. 現状と課題	
1) 下田市の現状と課題	3-8
2) 下田市におけるサーフィンの現状と課題	9-15
3. 基本構想	
1) 目的	16
2) 位置づけ	17
3) 基本理念	18
4) 基本方針	18
5) 基本目標と目標別の施策（案）	19-24
6) 基本構想の体系図・全体イメージ	25-26
[構想の実現に向けて]	27

1. 構想づくりの背景

1) 下田市とサーフィンの関係



日本のサーフィンに重要な役割を果たしてきた下田市

日本のサーフィンは 1960 年代半ばアメリカのカリフォルニア、ハワイから伝わり、徐々に全国に広がっていった。その歴史において、本市のビーチは特にサーフィンに適した波を提供するため、サーファーにとって魅力的な場所として知られるようになり、数々の大会の開催地となった。

本市のビーチで腕を磨くことで、大会優勝者やプロサーファーとして活躍する選手が多く生まれた。さらには、現在の日本サーフィン連盟理事長や S リーグチェアマンといったサーフィン界を牽引するリーダーは本市の人材である。

こうしたことから、本市はサーフィンの適地としてだけではなく、サーフィン界全体の発展に寄与する重要な地域として、日本のサーフィン文化を支えてきた。

東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンとして

2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会開催に向け、スポーツ立国、グローバル化の推進、地域の活性化、観光振興等に資する観点から、参加国・地域との人的・経済的・文化的な相互交流を図る地方公共団体を「ホストタウン」として全国各地に広げる取組において、2017 年 12 月の第 5 次登録で本市はアメリカ合衆国・サーフィン競技のホストタウンとして登録された。

本市では「東京オリンピック・パラリンピックホストタウン下田市推進協議会」を組織し、その役割を果たしたこともあり、2022 年秋には米国から東京五輪女子サーフィン金メダリストのカリッサ・ムーア選手が、2023 年・2004 年には世界最高峰のチャンピオンシップツアー（CT）をまわる CT 選手であり、パリ五輪日本代表選手のコーナー・オレアリー選手が 2 年連続で来訪するなどサーファーたちの注目を集めている。



市民とサーフィンとの接点

本市では、教育の現場で市内小学校を対象にサーフィン教室を毎年行っており、子供たちがサーフィンに触れる機会が多くある。

さらに、介護予防の事業実績として「高齢者向けのサーフィン・SUP体験」があった。高齢者が、あらためて海を思い切り楽しむ活動を行政が推奨することで、全国から着目された。



高齢者向けのサーフィン・SUP体験

また、2022年に市内中学校4校を統合し、再編して創立された下田市立下田中学校の部活動に、全国で2例目となるサーフィン部が創設された。

サーフィンが地元の中学校の部活で行われることで、サーフィンの裾野が拡大するとともに、様々な活動が市民に伝わるようになり、市民がサーフィンを身近に感じられるきっかけとなった。また、サーフィン部に入部するために移住してくる家族も見られた。

そうしたことを契機として市役所にもサーフィン部が創部され、活動を続けている。



下田中学校サーフィン部の活動

2. 現状と課題

1) 下田市の現状と課題

本市の素地と特性

本市の人口は、令和6年12月1日時点において19,307人で、地理的には伊豆半島の南部東側に位置する海と山に囲まれた自然豊かな地域である。

米国ペリー提督が来航し、日米和親条約により1854年に日本で最初に開港された「開国のまち」として知られ、幕末開国の象徴的な役割を果たした。こうした歴史的遺産は、現在でも観光資源として活かされており、当時の雰囲気や今に伝える街並みとともに、米国やロシアなどと国際交流を続けてきた。

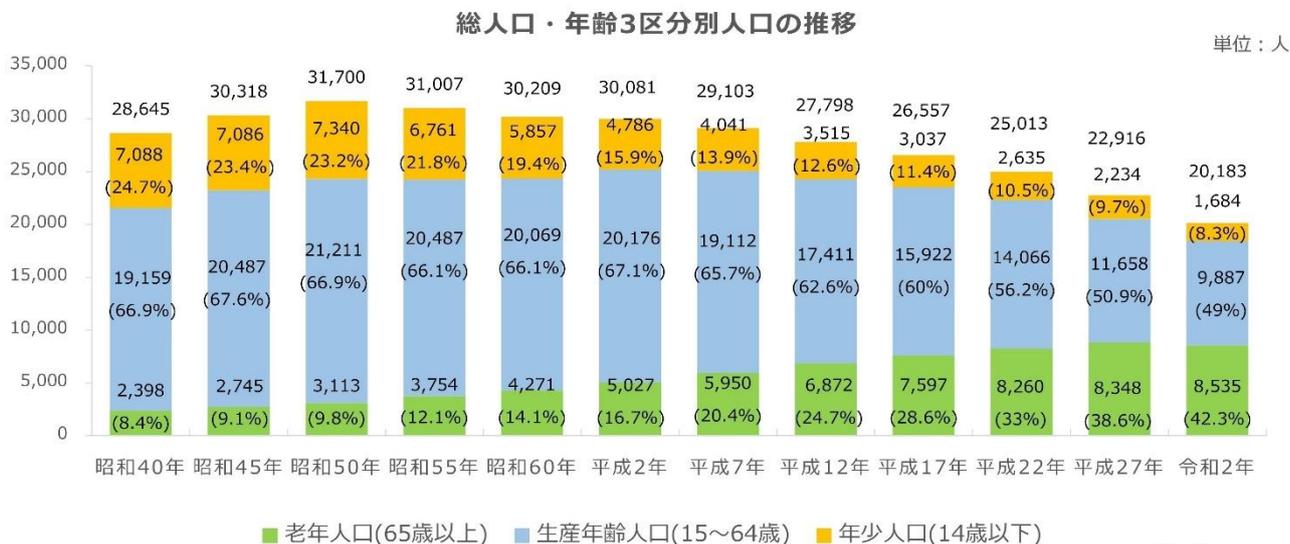
伊豆急下田駅は鉄道の終着点であるとともに始発点でもあることから、交通の要所としての重要性を持つ。また、下田港は伊豆諸島への航路の拠点であり、神新汽船が運航している。これに加えて、現在整備が進められている伊豆縦貫自動車道が開通すれば、沼津と下田の間(60km)が、現状の90分から60分へと大幅に短縮される見込みであり、地域のアクセス向上が期待されている。



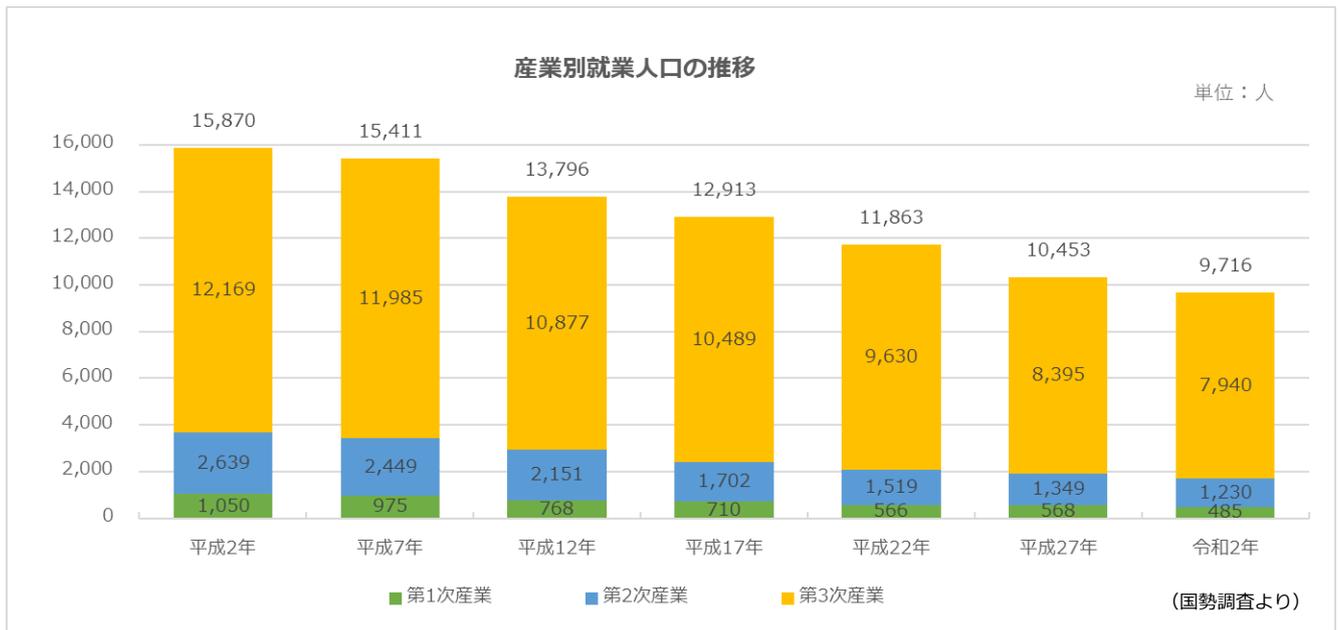
人口減少と産業構造の偏り

本市の総人口の推移をみると、昭和30年以降増加傾向にあったが、昭和50年の31,700人をピークに、その後は減少を続けている。平成2年以降は減少の度合いがやや拡大し、令和2年には20,183人となり、昭和50年のピークより36%の減少となった。

年齢階層別の人口は、昭和50年に年少人口(14歳以下)の割合が23.2%、老年人口(65歳以上)の割合が9.8%であったところ、令和2年の年少人口は8.3%、老年人口は42.3%と、人口の減少とともに少子化・高齢化が急速に進んでいる。



産業分類別就業人口については、平成2年には15,870人であったが、令和2年には9,716人と39%の減少となっている。また、その割合では、第1次産業（農林漁業）従事者が5.0%、第2次産業（工業）従事者が12.7%に留まるのに対して、第3次産業（サービス業）従事者が82.2%と多数を占めている。



美しい海と自然環境が観光を支えてきた

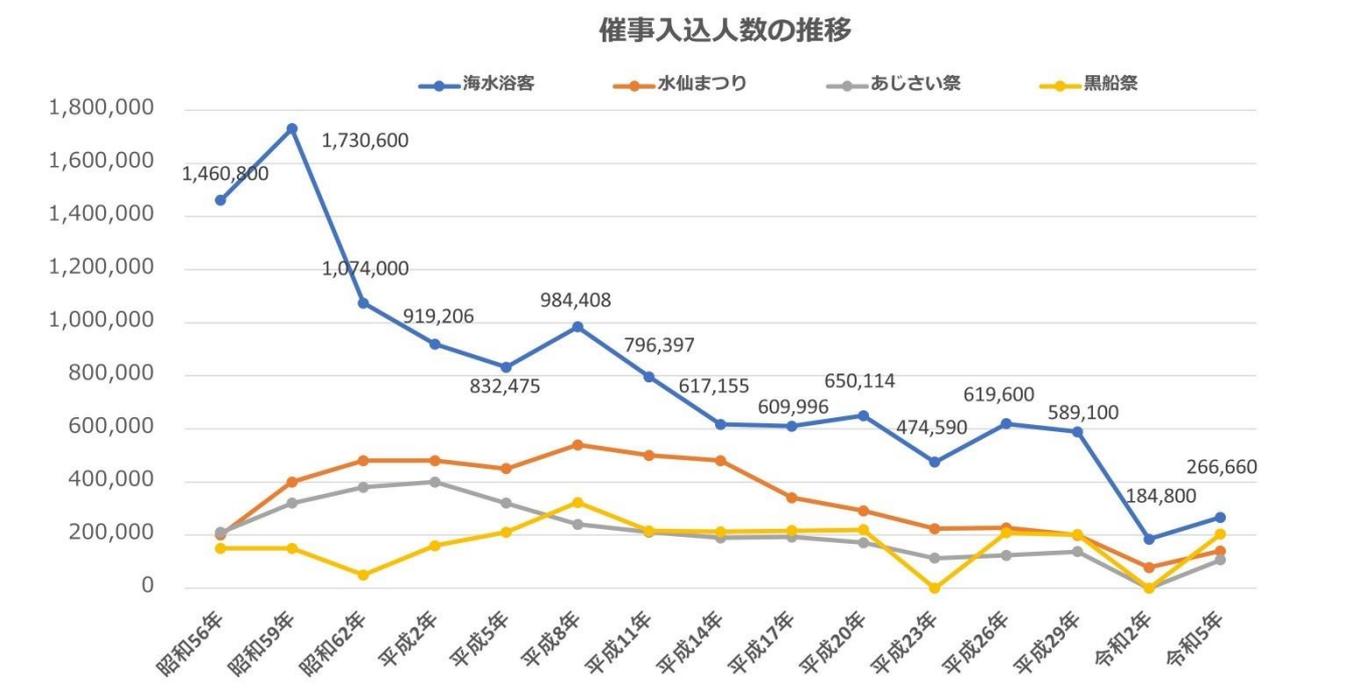
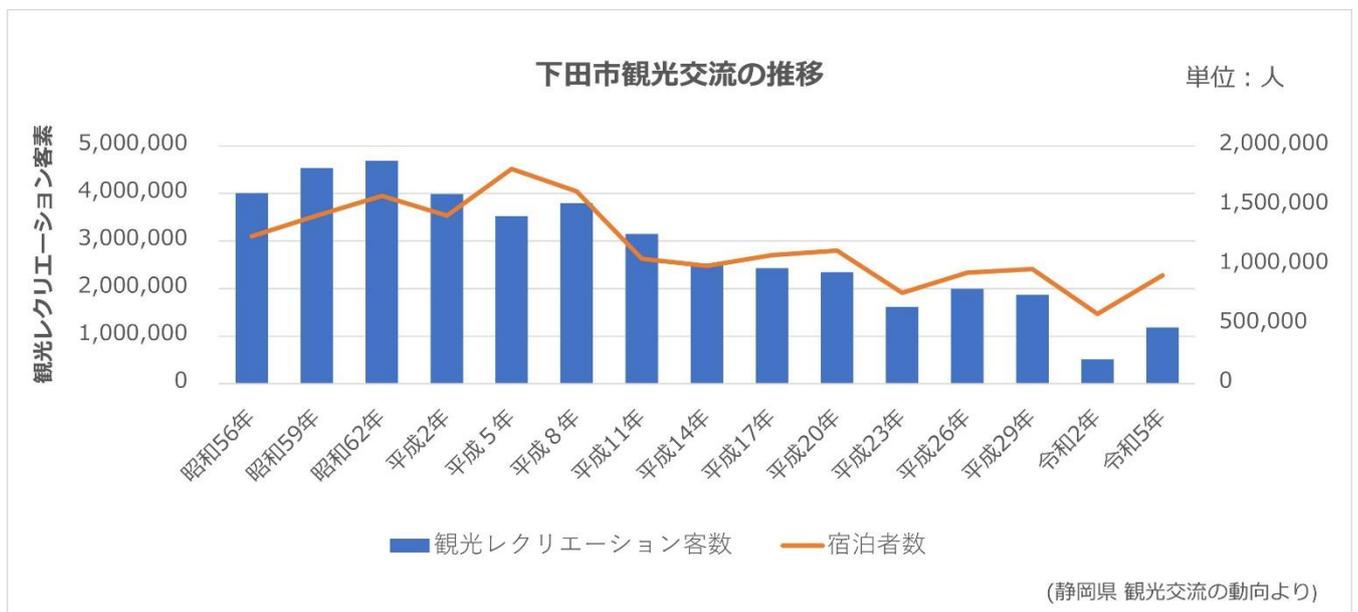
1961年に伊豆急行が開通したことで、温泉・歴史・自然などを中心とした観光地として発展し始めた。天城山系から続く急峻な山々と47kmに及ぶ海岸線は美しい景観を形作り、観光の大きな財産となっている。10箇所の海水浴場においては、透明度抜群の白砂のビーチを求め、毎年多くの海水浴客が市内外から訪れている。年間平均気温が約17℃と温暖で、降水量も年間1,900mm余りと豊富。様々な草花や果実が四季を通じて楽しむことができ、黒潮が育む海産物と併せて市の魅力となっている。

また、湧出する温泉や幕末開港の歴史、美しい海を活用したサーフィンをはじめとするマリンスポーツなど多くの観光資源に恵まれ、首都圏を中心に多くの来訪者を受け入れる観光地として発展を続けてきた。

観光交流客数の大幅な減少

本市の観光レクリエーション客数は、昭和 59 年度に減少傾向に転じ、平成 26 年度に 200 万人、平成 29 年度には 190 万人、令和 5 年度は 120 万人を下回るようになった。

催事入込人数は、おおむね観光レクリエーション客数の傾向と同様、減少傾向にある。特に海水浴客数の減少は大きく、平成 8 年度 984,408 人から平成 29 年度に 589,100 人、コロナ禍を経て令和 5 年度には 266,660 人となっている。





通年型観光業の創出

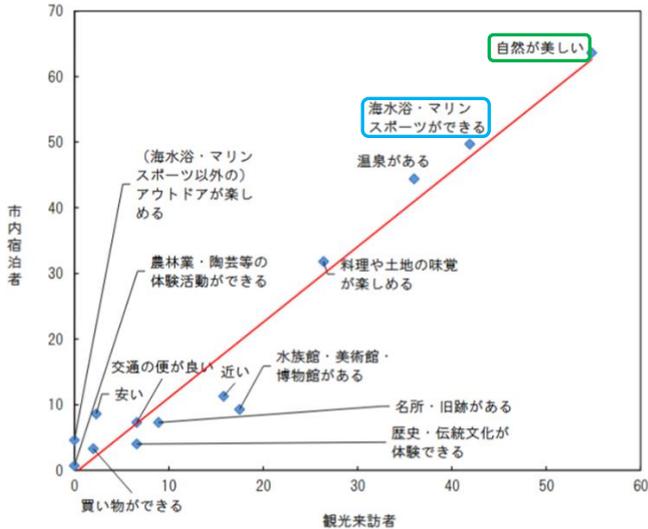
本市の経済は観光業に大きく依存しており、季節毎にさまざまなイベント等を開催し誘客を図っているが、観光客は夏季の海水浴シーズンに偏っている。

そうした中、本市では「世界一の海づくりプロジェクト」として「世界一身近に楽しめる海」「世界一市民が誇れる海」の実現を掲げており、サーフィンのように温暖な気候を利用した通年型のマリンスポーツ、自然体験型のアクティビティの開発が進められており、観光資源を通年で活用する、通年型の観光業への転換が求められている。

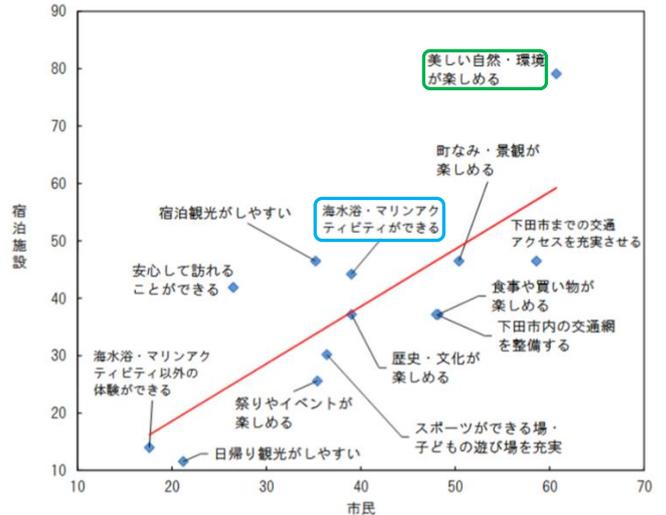
観光まちづくりに関する市民アンケートより

第2次下田市観光まちづくり推進計画におけるアンケート調査では、本市を訪れる主な目的は観光来訪者・市内宿泊者とも「自然が美しい」に次いで「海水浴・マリンスポーツができる」となっている。

■ 来訪の目的（宿泊者、観光来訪者）

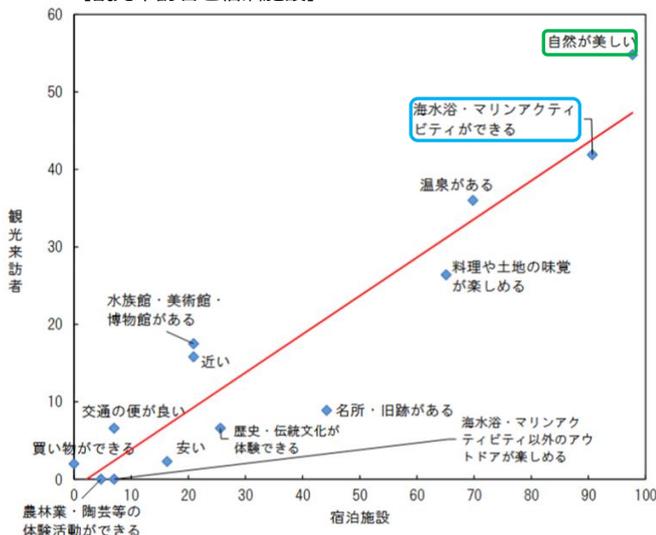


■ 今後注力すべき取組（宿泊者、市民）

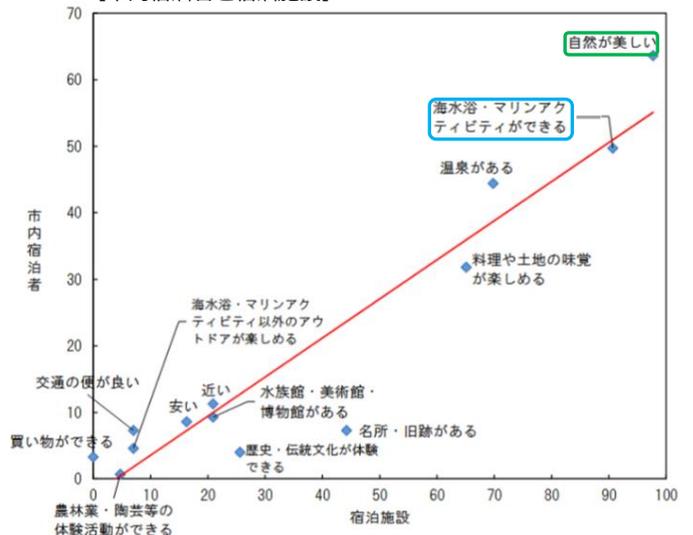


■ 観光来訪者・市内宿泊者が本市を訪れた目的と宿泊施設が考える本市の強みの関係性

【観光来訪者と宿泊施設】



【市内宿泊者と宿泊施設】



生涯スポーツの振興

本市の教育・スポーツの分野においては、自然や歴史・文化を活かした教育の充実、自然環境と地域特性を活かしたスポーツの充実を推進している。また、自然環境を活かしたスポーツの大会や合宿の誘致を進めるとともに、市民誰もが生涯を通じてスポーツ活動に参加できる仕組みとして、総合型地域スポーツクラブをつくることも検討事項の一つとなっている。



こうした取組が進み、“自然環境を活かしたマリンスポーツが盛んな市”といった個性が発信できれば、来訪・滞在とともに移住・定住への有効な動機付けとなり、人口流入にも期待ができる。

自然環境の保全と共生・防災対策が重要

海岸や森林は、市民の社会生活の基盤であると同時に観光資源としても極めて重要であり、その環境を守るために海と森、川の上流と下流を常に一体的に捉え、環境と景観の基盤である森林や海岸線の保全を図り、自然と共生した土地利用を推進している。

また、本市は自然災害を受けやすい立地条件にあり、自然災害から市民生活や訪れる人の安全を確保するための防災基盤整備を実施し、災害に強いまちづくりを進めている。



下田市の現状と課題【整理】

●歴史・文化

開国のまち・グローバルコミュニケーションの素地あり

●立地・地勢 = 半島の先端

伊豆急下田駅は鉄道の終着点であり始発点（伊豆急行）

下田港は伊豆諸島航路の拠点（神新汽船）

伊豆縦貫自動車道が整備中

= 沼津⇄下田間（60 km）は 90 分から 60 分になる

●人口・産業

少子化高齢化による人口減少の進行

第3次産業に偏った産業構成

地域経済全体が縮小

●自然・環境

天城山系から続く急峻な山々

多くの砂浜や入り江を含む 47 kmの海岸線 ⇒ 美しい景観をつくる

亜熱帯から亜寒帯までの植生 年間平均気温 17℃

太平洋が育む豊富な海産資源

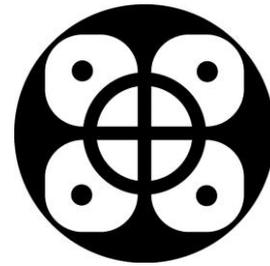
四季を通して生育する草花や果樹 温泉地

●観光

観光レクリエーション客数の減少

海水浴客の大きな減少

通年型観光への転換



市の取組として

■教育・スポーツ

自然や歴史・文化を活かした教育の充実

地域特性を活かしたスポーツ推進

生涯を通じてスポーツに参加できる仕組みづくり

（総合型の地域スポーツクラブなど）

スポーツの大会や合宿の誘致

■自然環境・防災

海岸や森林は社会生活の基盤であるとともに観光資源としても重要

自然と共生した土地利用

自然景観や海浜環境の保全・防災対策

災害に強いまちづくり

■課題

観光産業に過度に偏った産業構造

自然環境資産としての海の活用が 季節型／イベント型／誘致型／外発型 である

本来の素地を活かした通年型・内発型の事業化が求められる

例) 固有の自然環境である 海・波・風・浜 を通年で活用する



2) 下田市におけるサーフィンの現状と課題

特徴の異なるサーフポイントが豊かに存在

本市のサーフポイントは7箇所も存在し、それぞれの方角が異なっていることから、波のうねりや風向きに合わせ、車で10～15分かけて移動すれば違う風景と違うコンディションの波を選択することができる。



オフショア：陸から海へ向かって吹く風 波面が整いサーフィンに良いコンディションをもたらす

オンショア：海から陸へ向かって吹く風 波数は多いが波面が乱れサーフィンにはあまり好ましくない

1. 白浜プリンス前



- 向き：オンショア/北東・東 オフショア/西・西南西
- 波質：波のサイズが小さいときはメローなブレイクだが頭サイズを超えるとワイドなハードブレイクとなる 中上級者向き
- 特徴：リーフセクションでブレイクする変化のある波
- 注意：ロータイトのサーフィンは危険 駐車場が狭いので近隣に迷惑がかからないように
- 駐車場：あり ● トイレ：あり ● シャワー：温水有料あり

2. 白浜大浜



- 向き：オンショア/北東 オフショア/西・西南西
- 波質：遠浅で波のブレイクはやさしく乗りやすい 波の小さい時は初級者の方でも安心 波が大きくなるとパワフルなブレイクとなり中上級者向き
- 特徴：東のうねりが敏感に入りやすい 波の小さい時は厚めのブレイク 乗りやすい 大きい時は力強い速めのブレイク
- 注意：両サイドの岩場
- 駐車場：あり ● トイレ：あり ● シャワー：温水有料あり(民間)

3. 多々戸浜



- 向き：オンショア/南・南西 オフショア/北東・北
- 波質：遠浅で波のブレイクはやさしく乗りやすい 初心者でも安心 波が大きくなるとパワフルなブレイク
- 特徴：南向きでうねりが入りやすくコンスタントに波がある 遠浅で1年を通して良い波がブレイク 東の風を受けない唯一のポイントなので混雑 ロングボードは左側利用
- 注意：ビーチ左側のゲートは閉門する時間有
- 駐車場：あり ●トイレ：あり ●シャワー：温水有料あり

4. 入田浜



- 向き：オンショア/北東・南寄りの風全般 オフショア/西・北西
- 波質：深い水深から急激に掘れる波質 パワーもありサイズのある時は中・上級者向けのポイント
- 特徴：南のうねり、東のうねりが入りやすい 左側の岩場にヒットした横波が入るためヨレたクセのある波質が特徴
- 注意：ビーチ付近には住宅やホテルが多いので早朝の騒音には充分気配りを
- 駐車場：あり ●トイレ：あり ●シャワー：水無料あり(夏期有料)

5. 吉佐美大浜舞磯



- 向き：オンショア/北東・南寄りの風全般 オフショア/西・北西
- 波質：ミドル付近からワイドなダンパーが中心だが、地形が整うとレフトはチューブを形成
- 特徴：比較的遠浅で安定したブレイク オフショアの 때가ベスト
- 注意：駐車場は吉佐美大浜の広い駐車場を利用 左側のインサイドには尖ったリーフが点在
- 駐車場 ●トイレ ●シャワー：吉佐美大浜の施設を利用

6. 吉佐美大浜



- 向き：オンショア/北東・南寄りの風全般 オフショア/西・北西
- 波質：深い水深から急激に掘れる波質 パワーもありサイズのある時は中上級者向けのポイント
- 特徴：南と東のうねりが入りやすい 東のうねりはダンパーが、南・南西のうねりは切れた波が多い リーフあり
- 注意：ゴミは持ち帰るよう心掛け 右側・左側の岩場付近はサイズが上ると強いカレントができる
- 駐車場：あり ●トイレ：あり ●シャワー：温水有料あり(民間)

7. 田牛海岸



- 向き：オンショア/北東・南寄りの風全般 オフショア/西・北西
- 波質：エキスパートオンリーのハードブレイク 波の大きいときはショアブレイク気味のチューブが出現
- 特徴：ローカルが待ち望んでいる特別なスポット
- 注意：路上駐車禁止
- 駐車場：あり ●トイレ：あり ●シャワー：なし

求められるサーフィンのための環境整備

サーファーにとって、駐車場・トイレ・シャワーなどの設備が、快適かつ充実して整備されていることは重要なポイントである。そのためには市民及び観光関係者のサーフィンに対する理解をさらに深めていくことが前提となる。

例えば、一般的に駐車場が開くのは午前 8 時。朝一番で海に入ったサーファーが帰ろうという時間である。午前 6 時に開いていれば、サーファーにとって利用しやすい環境となる。駐車場の営業時間のミスマッチがみられても、解決に至っていないのが現状である。

千葉県一宮町・いすみ市の例では、移住・定住者にサーファーが多く、既存住民がサーファー・ウェルカムである。サーファーを大切にしようという価値観が醸成されることで、飲食業、宿泊業はもとより不動産業、建設業にまで及び、相乗効果を生んでいる。



本市を含めて伊豆半島はコンパクトなビーチが多く、来訪者の増加とともにトラブルが増えたり、環境整備が自然破壊につながる恐れもある。そうならないよう、地域住民の理解を深めたうえでの自然環境と融合したモデルとなるような環境整備が求められる。質の高いサーフシティをつくることで、その価値の共有を求めて良質な人びとがやって来ると考えられる。

海辺の様々な活動、活動に係る人そして情報を横断するような拠点を整備することも求められている。そうした拠点が整備されることで、サーフィンなどの地域の海辺をフィールドに活動している団体に限らず、地域の様々な団体や活動が横断的に連携でき、点ではなく面で海辺の安全と安心が向上し、誰もが気軽にアクセスできる海辺の環境が進むと考えられる。



下田市のサーファーたちは、自主活動として以下ポイントにて 30 年以上に渡り毎月ビーチクリーン活動を行っている

●白浜大浜：第 2 第 4 日曜 ●多々戸浜：第 2 日曜 ●入田浜：第 3 日曜 ●吉佐美大浜：第 1 日曜

市民に海とサーフィンの価値を共有

“夏以外の下田の海には人が少ない”という声が多くあった。湘南やオーストラリアでは、冬であっても海や砂浜で遊ぶ住民や子供たちが多くいるという。美しく魅力的な海があるのに、本市ではまだまだ市民と海とに距離感があるといえる。

朝、仕事に行く前にサーフィンすることは、サーファーにはごく普通のライフスタイルだが、そうでない人にはあまり理解がされない。サーフィンをテーマにまちづくりを進めるためには、サーフィンをしない人への理解を進めていく必要がある。

また、目の前でサーフィンの大会が催されていても市民が気に留めないような状況がある。市民もそうした大会などに興味ももてる仕掛けが求められている。

千葉県いすみ市では「サーフタウンフェスタ」を市のバックアップを受けて毎年開催している。サーフィンをしない人もフェスタに集まってくる状況が生まれている。市をあげてのイベントの中心にサーフィンがあることに大きな理解が得られている。

水質が良く、自然環境が美しく、サーファーにとって憧れの地「下田」がサーフシティを標榜する素地は整っている。今後は、サーファー以外の市民にもサーフィンの理解を広げていくテーマと、参画できる仕組みが求められている。

関係人口の創出にサーフィンを活用

関係人口とは、特定の地域に継続的に多様な形でかかわる人のことで、観光以上移住未満と例えられる。具体的には、兼業や副業で地域に関わる、イベントや地域活動に参画して交流を重ねる等さまざまなスタイルがある。

例えば再訪者は、訪れる地域を単なる「観光地」としてではなく、大切な地と捉えるようになる傾向がある。本市に訪れるサーファーの多くは、下田の魅力的なサーフィン環境に魅了され、繰り返し訪れている。地域の祭りなどの行事や地域活動などにも参加する来訪サーファーもあり、第2の住民のようになっている例も数多くみられ、そのまま移住定住につながっているケースもみられる。

人口減少が進むなか、地域づくりの担い手となる人材が地域に入ることが期待されている。本市が有するサーフィンの魅力や美しいビーチライフを求める多様な年代層が、サーフィンを通じた関係人口になりえると考えられる。

国内サーフィン人口 50 万人は多額の支出をしている

公益財団法人日本生産性本部「余暇の現状と産業・市場動向 レジャー白書 2024」によれば、余暇活動への参加・消費の実態において、2023 年における日本のサーフィン参加人口は約 50 万人であった。

年間平均活動回数は 18.4 回で、年間平均活動回数が極端に少ないスキー・スノーボードを除けば、1 回当たり費用はゴルフに次いで 6,720 円となっている。年間平均費用は 123,700 円と、28 種目あるスポーツ部門のなかでゴルフ、乗馬に次いで 3 位に位置する。日本のサーファーたちは、ゴルフや乗馬に引けを取らないレベルでサーフィンにお金をかけている。

サーフィンがもたらす経済効果に着目し、サーフィン関連産業の創出に力を注ぐことが求められている。

	参加人口 (万人)	年間平均活動 回数(回)	1回当たり費用 (円)	年間平均費用 (千円)
ゴルフ	530	17.3	9,510	164.6
乗馬	70	24.4	5,440	132.8
サーフィン	50	18.4	6,720	123.7
スキー	280	2.9	8,750	91.9
スノーボード	180	1.8	7,460	61.9
ゲートボール	40	16.0	1,250	20.0
野球	520	17.1	890	15.3
サイクリング	580	37.0	660	24.6
卓球	540	16.4	590	9.7

(レジャー白書2024 より)

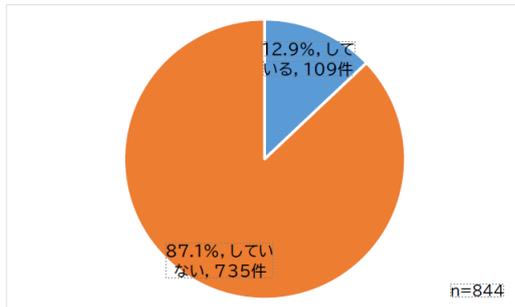
マリンスポーツ・サーフィンはまちづくりに好影響がある

下田市教育委員会では、令和6年10月に下田市民のスポーツ実施状況やスポーツに関する意識調査を行った。(対象：市内在住の中学生以上の男女 回答数：844件)

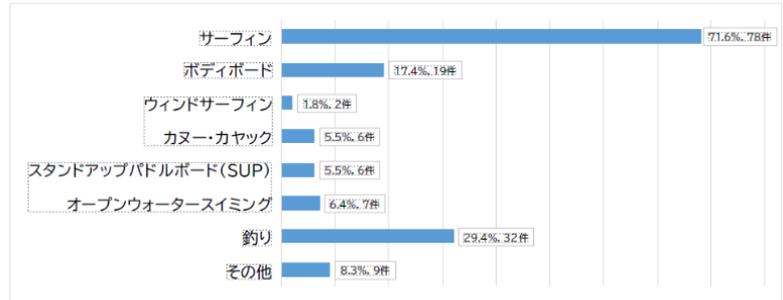
本市においてサーフィン等のマリンスポーツを実施していると回答した約13%の市民のうち、サーフィンを実施している人は71.6%いた。これは市民の約10人に1人がサーフィンを行っていることになる。さらに、今後マリンスポーツを始めたいと回答した約15%の市民のうち、40%以上がサーフィンをしたいと回答している。

これらのデータから、本市においてサーフィンは確実に定着し、身近なスポーツとして認められていると考えられる。

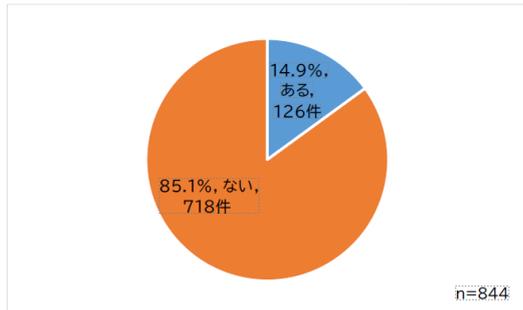
Q9. サーフィン等のマリンスポーツは実施していますか？



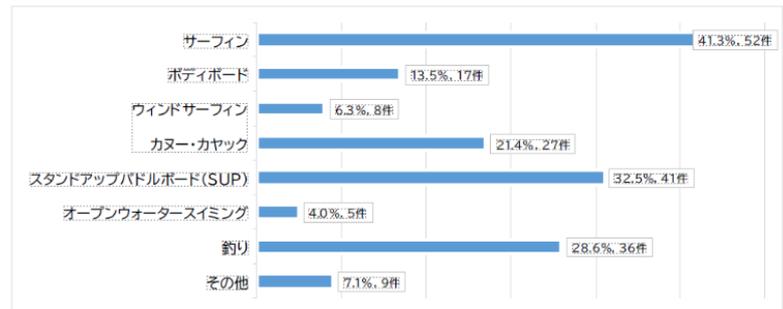
Q10. 実施しているマリンスポーツの種類(Q9で「している」を選んだ方※複数回答可)



Q20. 今後始めてみたいマリンスポーツはありますか？

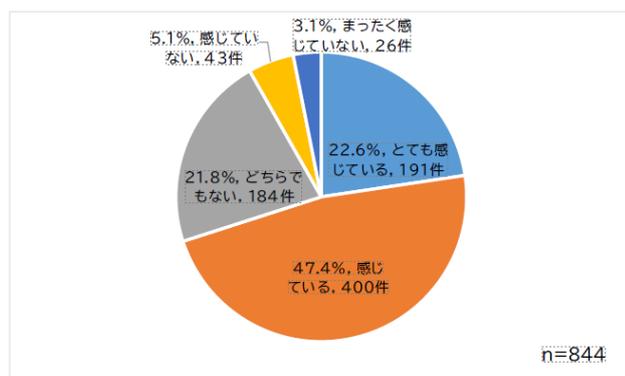


Q21. 今後始めてみたいマリンスポーツの種類(Q20で「ある」を選んだ方※複数回答可)

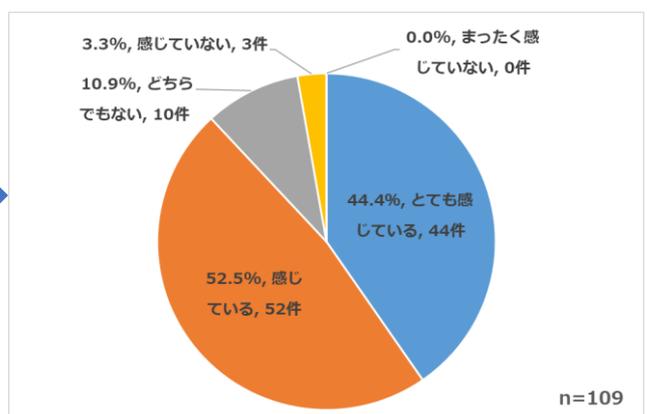


また、東海大学スポーツマネジメント戦略室の協力により、本アンケートの結果に基づき「マリンスポーツ経験者」と、「地域愛着」「定住意向」「幸福感」との相関分析を行った。

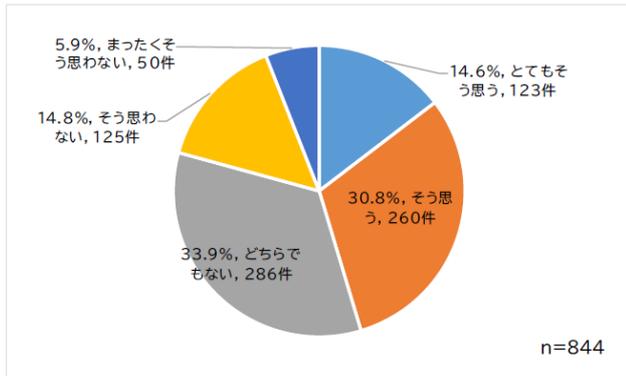
Q37. 下田市に愛着を感じていますか？



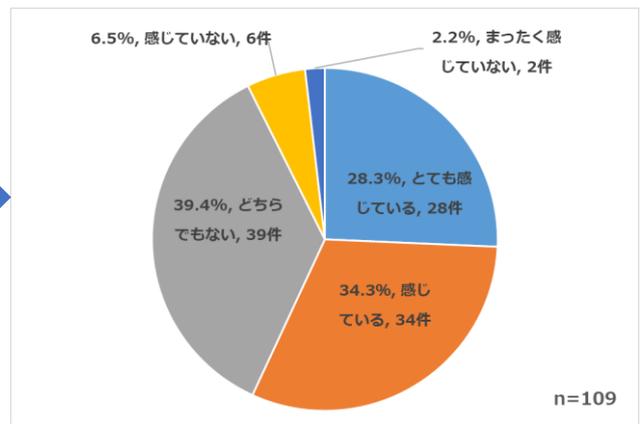
■ Q37. 全回答者のうち「マリンスポーツ経験者」の数値



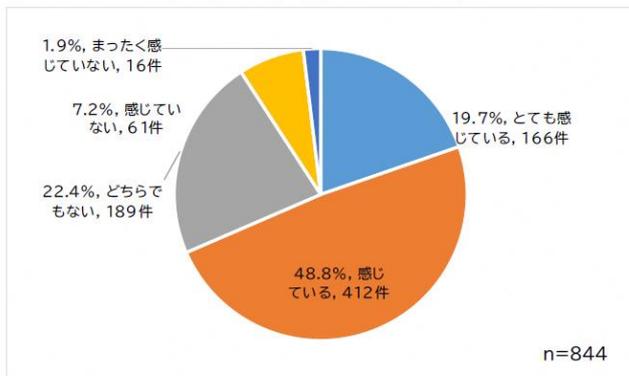
Q38. 下田市に住み続けたいと思いますか？



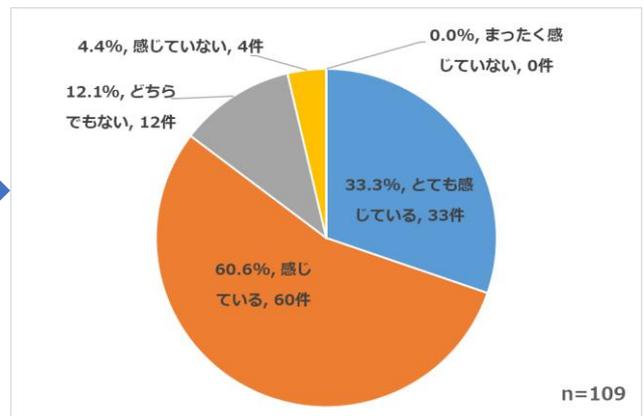
■ Q38. 全回答者のうち「マリンスポーツ経験者」の数値



Q39. 自分の生活に幸福感や充実感を感じていますか？

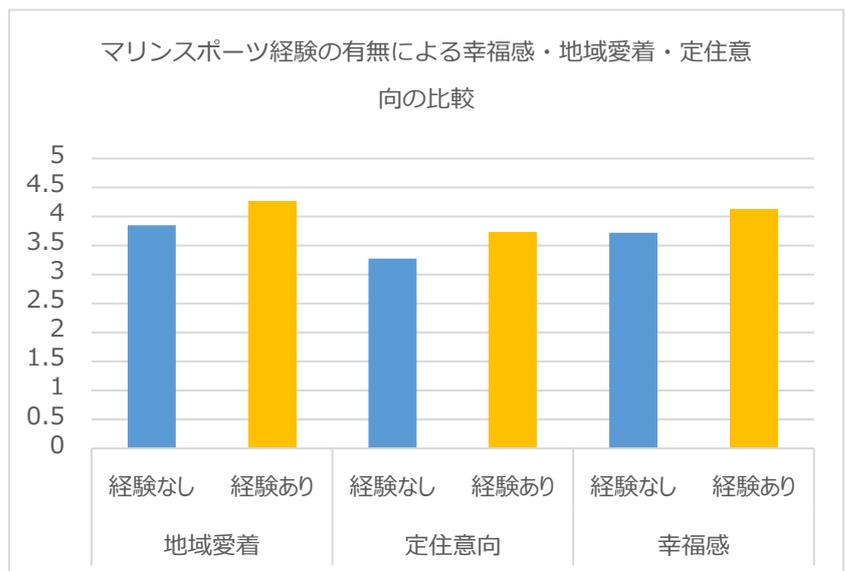


■ Q39. 全回答者のうち「マリンスポーツ経験者」の数値



分析の結果、「地域愛着」「幸福感」には弱い相関が、「定住意向」においては中程度の相関があることが分かり、マリンスポーツを移住・定住の一要因とする定説が客観的なデータにより補強される結果となった。

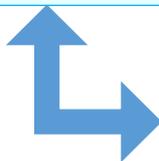
さらに、マリンスポーツ経験の有無が「地域愛着」「定住意向」「幸福感」に対し、どのような影響を与えているか、各項目の5段階評価の平均値を用いて比較すると、全項目でマリンスポーツ経験者の方が高い数値となり、経験者・非経験者の間に有意な差が見られたことから、マリンスポーツがまちづくりにおいて重要な三項目「地域愛着」「定住意向」「幸福感」に対しポジティブな影響を与えていることが分かった。



特筆すべき点はマリンスポーツ経験者の中に、高校生も含まれていることで、本市の将来に向けた「ひとづくり」の面においても、マリンスポーツは重要な役割を果たすものと期待される。

下田市におけるサーフィンの現状・課題【整理】

- サーフポイントが一つのまちに7箇所もあるのは、全国で極めて稀少な例
 - 海と波と浜とその景観に多様性がある
 - 国内でも極めて水質が良い



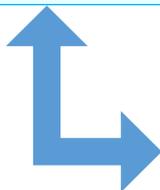
■課題

- ・一般の観光客・海水浴客とサーフィン愛好者が夏にバッティングする
- ・道路渋滞、駐車場不足、シャワー施設等未整備のケースが多い
- ・活動や情報が横断できる海辺の拠点整備

■再認識したい点

- ・夏季に限定をせず、四季を通してサーフィン愛好者たちは下田の海を訪れている
- ・国内のサーフィン人口50万人は、年間を通してサーフィンに多額の支出をしている

- サーフィンそのものが自然と生きていくライフスタイルである
- サーファーは関係人口となりえる
- 第2の住民のように繰り返し訪れているサーファーが相当いる
 - 下田の海を取り巻く自然環境とその生活がその価値を増幅させている
 - だから定住者がいて、移住者がいる



■課題

- ・地域住民のサーフィンに対する理解
- ・市民と海との距離感がある
- ・サーファー以外の市民にも理解が得られるテーマと、参画できる仕組みが求められている

■再認識したい点

- ・市民の約10人に1人がサーフィンをしている
- ・マリンスポーツ経験者は「地域愛着」「定住意向」「幸福感」に対してポジティブな影響を与えている

◎下田市のサーフィンを顕在化する

1. 観光－産業－移住－サーフィンを、同じ次元に位置づける
2. サーフィンを、下田のライフスタイルの主流へ押し上げる
2. サーフィンが持つ力で生活と産業を連携し、活性化させる

3. 基本構想

1) 目的

“サーフィンとその周辺領域が持つ価値をまちづくりに活かす”

今回、サーフィンを活かしたまちづくりを進めるべくサーフシティ構想の策定を打ち出したのは、本市の強みである恵まれた豊かな自然を活用し、サーフィンを基軸としたライフスタイルの推奨、自然回帰型スポーツとしてのサーフィン環境の充実化、海辺の開放空間を活かしたサーフィン周辺のコンテンツ・プログラム・サービス開発などを通して、まちの魅力の磨き上げに取り組むためである。

策定にあたり以下の3点について留意する必要がある。

(1) 自然資源を活用した産業の多様化

本市の豊富な自然資源を活かし、観光業以外の産業も活性化させる。漁業や農林業などの一次産業を基盤に、地元で生産された食材や特産品を地域ブランドとして確立し、観光と連携させた産業の振興を目指す。自然環境を活かした再生可能エネルギーの導入や、エコツーリズムなどの環境に優しい産業活動の推進も視野に入れていく。



(2) 観光業の通年化と地域資源の活用

観光業の課題である季節依存型の収益モデルに対して、サーフィンのように通年型の体験プログラムの開発が急務である。夏の海水浴だけでなく、春には花めぐりやハイキング、秋には地元の収穫祭や伝統行事、冬には温泉観光や歴史的資源を活かした文化体験など、地元の海や山、温泉などの観光資源をフルに活用し、四季折々に異なる楽しみ方を提供する。

(3) 持続可能なまちづくりへの取組

持続可能なまちづくりのためには、市民と行政、企業が一体となった協働の取組が不可欠である。地域資源の保全や活用を進めつつ、自然環境を未来の世代に引き継ぐための取組を進める。また、市民が生涯を通じて学習・スポーツに参加できる仕組みづくり、新しい地域ビジネスや産業の創出など持続可能な地域経済の発展を図るための施策も実施していく。



2) 位置づけ

関連計画との関係性

本構想の策定にあたっては、市の上位計画となる下田市総合計画をはじめ、下田市観光まちづくり推進計画や下田市健康増進計画、現在策定中の下田市スポーツ推進計画等、関連する分野別計画と整合性を図り連携していきます。



第5次下田市総合計画 基本構想

■まちづくりの基本理念

『下田を愛する、市民を始めとする幅広い人の参加により、本市の持つ自然や歴史、文化を活用し、市民一人ひとりが誇りを持って暮らすことのできるまちづくり』

- ◎市民を始めとする幅広い人の参加・・・下田ファンの国内外サーファーとその家族、関係者
- ◎本市の持つ自然や歴史、文化を活用・・・本市固有のサーフィンを取り巻く環境、人材、文化
- ◎市民一人ひとりが誇りを持って暮らす・・・オリパラレガシー、世界的ネットワーク、豊富な人材

■まちの将来像

『時代の流れを力に つながる下田 新しい未来』

- ◎新たな社会環境への対応・・・自然と共に生きていくライフスタイル、生涯スポーツ
- ◎新たな人の流れ つながりの構築・・・四季を通じたサーファー来訪地、サーフィンの産業化
- ◎地域の絆の強化・・・下田中学校サーフィン部の設立、強力な市民支援活動
- ◎情報通信技術の活用・・・働く場所の自由度アップ、下田サーフィンの見える化

■まちづくりの柱

- ◎美しく生活しやすい・・・サーファーたちの自然共生の感受性と使命感への期待
- ◎郷土への誇りと愛着を育む・・・サーファーや移住者もまちづくりへ参画、UIJ ターン
- ◎人が集い、活力のある・・・観光業、飲食業、宿泊業とサーフィンの積極的な連携
- ◎安全・安心・・・サーフィンをしない人の視点、安全な海、安心な浜

↑ まちづくり構想のキーワード

↑ サーフシティ構想に関連する事項

3) 基本理念

『サーフィンが持つチカラを、 下田のまちづくりへ積極的に活かそう』

4) 基本方針

その1：サーフィンを通して海の環境を守り、価値を繋ぎます

- 下田は“海が大切な財産”であり、サーフィンを通して海の環境を守り、その価値を高めて、美しく、健やかで、豊かな環境を維持します。



その2：サーフィンがもつ可能性を、まちづくりに活かします

- 自然・健康・文化・環境・歴史・産業・人材に広く深く繋がる“サーフィンの魅力”を活用し、個性豊かなまちの魅力をつくります。



その3：みんなで関心を寄せ合い、オール下田で取組めます

- 市民・来訪者・事業者・行政の立場を超えて、みんなが“下田市民”としてサーフィンに関心を寄せ合い、連帯感と思いやりを持って取組めます。



5) 基本目標と目標別の施策（案）

目標① 快適なサーフィンとビーチライフを実現するインフラ整備と環境保全活動の推進

- ➔ 快適なサーフィンを実現するための情報化とまちづくりへの参画
- ➔ 快適なビーチライフを実現するためのインフラ整備と環境保全活動の推進

同一市内でありながら、趣が異なる風景と違うコンディションの波に出合える7箇所のサーフポイントを明確に情報発信していくことが重要であり、サーファーはもとより、市民に向けて認識を拡大していく必要がある。

本市のサーフィンに関するデータが不足している。サーファー人口、サーフィンでの来訪者数、サーフィンに関連するビジネスや大会開催地としての経済効果などの数値化は早急を実現する必要がある。構想を示し、展望を語るうえでの重要な裏付けであり、極めて重要な項目である。

駐車場の営業時間のミスマッチの解消、トイレやシャワー、駐車場の整備と管理・清掃の徹底など各ビーチで快適な環境を整備していく必要がある。まちづくりにサーフィンを取り入れること、まちづくりの担い手にサーファーが入ってもらうこと、そのうえで本市のビーチのあるべき姿としてソフト・ハード整備の理想形を示し、整備を推進していく必要がある。

大切な海の環境を守るためには、多次元での定点観測や学習会、さらに清掃や保護活動など環境保全のための活動を、持続的かつ発展的に行っていく必要がある。



■ 施策（案）

a) 下田市のサーフポイント 7 箇所の明確な情報発信

- ・ 正確な名称やポイントの特徴やルールをあらためて情報整理
- ・ サイン・マップ・パンフレット等への明示
 - ➔ 冊子・パンフレットの作成
- ・ 安全確保・環境保全のためのレギュレーションやルールの整備
- ・ レスキューや津波避難体制の確立
 - ➔ 情報収集・研究・ルールの検討・整備
- ・ サーフィン大会を活用した情報発信
 - ➔ 全国的・世界的な大会の誘致と地域との交流プランづくり

b) 下田市におけるサーフィンに関するデータベース化

- ・ サーフィンによる来訪者・在住者・移住者・宿泊者などの数値化
- ・ サーファーズの意識・行動・仕事・事業継承の実態把握
- ・ サーフィンの経済波及効果や地域貢献度の把握
 - ➔ 調査・研究・検証活動（オープンデータ等活用）

c) 快適なビーチ周辺の整備と景観や自然環境の保全活動

- ・ 駐車場の不備システムの改善と再整備
(利用可能時間、年間パス型利用、維持管理含み料金設定等)
- ・ トイレ清掃の徹底と再整備
- ・ シャワー施設の適正管理と未整備エリアへのシャワー施設整備
- ・ スケートボードパークなど付帯設備の整備検討
 - ➔ 実態の正確な把握・情報収集・対策
 - ➔ 他地域での事例検証・検討
- ・ 環境保全のための定期的活動（定点観測、学習会、清掃活動、保護活動等）
 - ➔ 効果的かつ持続可能な活動の検証・検討・実施

【一つの考察として】

“世界サーフィン保護区”を目指す！

世界サーフィン保護区は NGO「Save the Waves Coalition」が 2009 年に立ち上げた。目的は、サーフポイント沿岸の人々はその地域の環境、文化、経済的価値への認識を高めることで、新たな開発に巻き込まれないよう波と周辺環境を守っていくこと。優れた波だけでなく、海岸線の保護にも力を入れ、経済的メリットも含めたサーフエコシステム概念を取り入れる。認定されれば、世界に誇るサーフスポットとして内外へ発信できる。審査は厳しく、認定ペースは年に 1 か所以下。これまで認定された地域は、世界で 12 か所あり、名立たるサーフトアウンが並ぶが、申請から認定まで 2~3 年かかったケースも多く、日本を含むアジアで、認定された地域はまだない。

世界サーフィン保護区 地域と認定された年

2009 年 マリブ (米国) 2010 年 マンリー (オーストラリア) 2011 年 エリセイラ (ポルトガル) 2012 年 サンタクルズ (米国) 2013 年 ワンチャコ (ペルー) 2014 年 バイア・デ・トドス・サントス (メキシコ) 2016 年 ゴールドコースト (オーストラリア) 2017 年 ブンタ・デ・ロボス (チリ) 2019 年 グアルダ・ド・エンバウ (ブラジル) 2020 年 ヌーサ (オーストラリア) 2022 年 プラヤ・エルモサ (コスタリカ) 2023 年 ノース・デボン (英国)

厳正な審査基準は 5 項目 (サーフィン保護区の審査基準)

- ① 波の質と一貫性 ② 重要な環境特性 ③ 文化とサーフィンの歴史 ④ ガバナンス能力と現地サポート ⑤ 優先保全地域

世界サーフィン保護区は行政と住民がサーフトアウンとして意識を高めていき、自然と文化の保護だけではなく、経済を含めたサーフィンの波及効果とサーフポイントの保護につなげていく取組。世界遺産のサーフポイントバージョンに近いが、世界遺産のように保護のために新たな規制がかかるわけではない。また、サーフィンだけを保護するのではなく、サーフィンを含めた地域の魅力を守っていくということが重要なポイントである。

.....

目標② サーフィンを通じた下田の魅力を高めるまちづくり・ライフスタイルの推進

- ➔ サーフィンを通じてグローバル&ローカルコミュニケーションを確立
 - ➔ 多様な価値を持つサーフィンを通じて積極的にまちづくりに参画
 - ➔ 「海」「波」「風」「浜」を活かしたライフスタイルの再認識と発信
 - ➔ サーフィンをしない人も共感できるウェルネスの価値観を共有
-

下田は、日本の幕末開国の歴史を持ち世界との交流を続けてきた。単にインバウンドに対応するためというだけでなく、国籍、世代、文化の壁を越えて、心豊かな人同士が、互いを受け入れ、尊重し、思いやりある行動によって生まれるのが、グローバルコミュニケーションである。ワールドクラス的环境を有し、ワールドレベルのサーファーが訪れる本市が、サーフィンを通じた異文化コミュニケーションがとれる環境を整備していくことは大切なことである。

地域住民にも、訪れる人にも、観光と産業とまちづくりを同じ視座で捉え、同じ次元で語るローカルオピニオンの存在が重要になっている。本市においては「ライフスタイルとしてのサーフィン」が、地域の魅力となっている。そうしたことから、サーフィンに関係する多くの人が、まちづくりにもっと積極的に関与していくことが求められている。

サーフィンをすることで、海だけでなく山や川といった自然に興味を持つと同時に、環境問題への意識が高まる傾向がある。持続可能なまちづくりを進めていくにあたり、サーファーが持つそうした意識を活かしていくことが重要になってくると考えられる。

サーフィンを成立させている要素としての「海」「波」「風」「浜」は、サーファーだけのものではない。その価値を、歴史的・科学的・地理的・芸術的に市民が再認識する機会や場面が必要である。学校教育はもとより社会教育においても、学びと触れ合いの機会と場面を積極的に進める必要がある。それは、自然環境にできるだけ負荷をかけない「サステナブルな生き方」を本質的に目指すものでもあり、よりいきいきとした人生を目指す積極的な生き方を志向する『ウェルネス』の価値観と多くの共通項を持っている。

ウェルネスは、単に病気かどうかだけで健康を考えるのではなく、よりいきいきとした人生を目指す積極的な生き方を表す。「身体・感情・精神・知性・職業・社会」という6つの要素から発展し、「環境」を含む多次元的な要素で成り立つのがウェルネスであり、サーフィンをする人はもちろん、しない人にもその価値観を共有できると考えられる。

現在の下田市総合計画には「サーフィン」というワードがでてこない。しかし、そこで示される政策には、サーフィンというフィルターを通すと実現しやすくなるであろう「自然環境・生活環境」「子育て・教育」「観光・産業・雇用・移住促進」「健康・福祉」「共生社会」といった項目が多数ある。サーフィンがすべてを解決するわけではないが、サーフィンが持つ価値は、まちづくりに大切な視座を与えてくれると考えられる。

■ 施策（案）

a) 下田市の「海」「波」「風」「浜」を学ぶ機会・触れ合う場面の創出

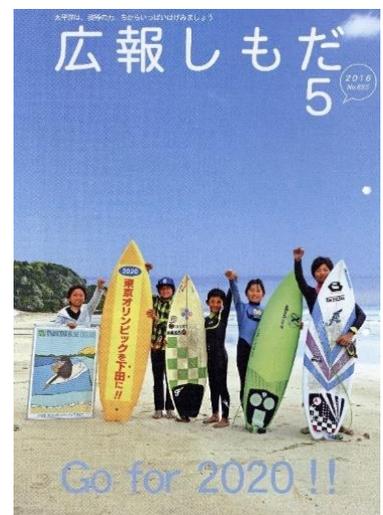
- ・授業や副読本へのサーフィンの取り入れ
- ・中学校サーフィン部の充実
- ・高校サーフィン部の創部（運動部×文化部）
- ・自然環境教育へのサーフィン関係者の参画
 - ➔ 教育委員会・学校との懇談・連携・協議・計画
 - ➔ 関係機関と検討委員会の設置
- ・サーフィンアカデミー・専門学校の創設
 - ➔ サーフィン関係者とともに教育機関・学校法人・企業等へアプローチ

b) サーフィンをアカデミックに捉えた 学び場・ミュージアムづくり

- ・サーフィンの歴史・文化・ファッション・芸術性を踏まえたミュージアムの開設
- ・公共や民間の施設や学校での期間展示
- ・海岸・浜を使っての仮設物による屋外展示
- ・アートから海洋ゴミまでカバーするようなテーマでアーティストやカメラマンといったメンバーの共創活動
 - ➔ 各種団体・市民による企画・創作・展示
 - ➔ ワークショップ等の企画・開催

c) サーフィンをテーマにしたメディアづくり

- ・市の特設サイトで下田のサーフィンを特集
- ・下田のサーフィンを出版物・映像作品として特別編集、発行
 - ➔ 市広報・市スポーツ振興部門との連携・協議・展開
 - ➔ 報道機関・映像配信企業・出版社等へのアプローチ



d) サーフィンを通じた異文化コミュニケーションの推進

- ・サーフィンと地域情報の多言語化の実現
- ・移住者や外国人との積極的交流の実現
- ・子供から高齢者まで幅広い年齢層がサーフィンやサーフィンの価値を楽しめる環境づくり
 - ➔ イベント・ワークショップの企画・開催
 - ➔ 市多文化共生部門・教育委員会・振興公社等との連携・協議・展開



e) サーフィンをしない人にも「ウェルネス」の価値観を共有

- ・よりいきいきとした人生を目指す積極的な生き方としての価値観をみんなで共有
 - ➔ 講演会・フォーラム・セミナー・ワークショップの企画・開催
 - ➔ 市健康福祉部門・教育委員会・医療機関との連携・協議・計画

目標③ 交流・関係人口拡大と移住定住促進、海の通年活用とサーフィン関連業との連携

→ 美しい自然とともにある生活と海の通年活用の具現化

→ サーフィン関連業と他分野事業との連携による新たな事業の創出

この地に暮らすサーファーにとって、下田は観光地ではなく生活地である。ここで生活し、サーフィンをライフスタイルとしてきた。本市には多くのサーフィンのレジェンドが存在し、全国的な影響力も大きい。生活地での暮らしぶりや生き方をセミナーや講演会などで発信することで、未来の移住者や次世代につなげていく必要がある。

視察した千葉県一宮町・いすみ市には「サーフィン業組合」があり、サーフショップに限らず、サーフィンを取り巻くあらゆる業種の人びとが自主的に組合組織をつくり、協働でサーフィン業の活性化に努めており、観光地から生活地へ、の好事例であると考えられる。本市にも、サーフィンに関連する事業がどれだけあるかを把握しておく必要がある。

初めてこの地へサーフィンに来た人が、ポイントに詳しいショップを訪ね、サーファー向きのカフェやレストランを使い、海やサーフィンに明るいオーナーが経営する宿泊施設に泊まる、といったところまで、その人のレベルやセンスに合ったガイドやコーディネートをする仕組みやサービスが必要な時代になった。ネット検索するだけではわからない、ローカルの本質的な情報を人びとは求めている。ビジターがガイドとつながると、サーフィンに限らない楽しみ方もできる。ビジターとローカルがつながると、再訪のきっかけとなる。ガイドツーリズムに対するニーズは高まり、サービス業や観光業、飲食業や宿泊業との連携が求められている。

本市に定住しているサーファーはもちろん、本市を繰り返し訪れて移住志向もあるサーファーならば、ゲストたちのニーズに応えることもできる。例えば、本市ならではの農産品や海産品、雰囲気の良いカフェや美味しいレストラン、サーファーの価値観にフィットする宿泊施設など。さらには、サーファーの持つ自然志向の目線を活かし、地域の多彩な自然環境とその資源の可能性を広げることで、地域や自然を活かした新たな働き方も創出できると考えられる。



■ 施策（案）

a) サーフィンによる豊かな暮らし「生活地：下田」の実現

- ・サーファーが本市の生活を語る機会づくり
- ・市のサーフィンの価値を繋いでいく場面づくり
 - ➔ トークイベント、ワークショップ、フォーラムの企画・開催
- ・サーファーが本市へと移住や定住をしやすくするための環境づくり
 - ➔ サーフィンをテーマとする移住・定住相談会の企画・開催
 - ➔ 市 移住定住促進部門との連携・協議・計画
- ・サーフシティ下田としてのブランド開発
 - ➔ 下田ブランドのボード・ウェットスーツ・アパレル等の商品化

b) 観光業・サービス業とサーフィン関連業との連携

- ・相互または共同で販売できるようなサービス化や商品化
- ・協働で商いやビジネスができる仕組みづくり
- ・高齢化が進み後継者がいない事業の事業承継の推進
 - ➔ 商工会議所・観光協会・市 産業振興部門との連携・協議・計画
- ・サーフィンの大会開催に伴うサポート及び交流の実現
 - ➔ 開催団体や出場選手を地域で積極的に支援する体制づくり

c) 自然とともにある仕事や農林水産業とサーファーとの連携

- ・山・川・街・漁・農 との連携によるコトおこし・シゴトづくり
 - ➔ 農協・漁協・森林組合との連携・協議・計画
 - ➔ 商工会議所・市 産業振興部門との連携・協議・計画

【一つの考察として】

“アロハスピリッツ”ならぬ“シモダスピリッツ”を提唱していく！

多くの市民や来訪者に共鳴していただけるようなメッセージづくり
サーフシティ構想を支えていくための市民運動となれるように

ALOHA SPIRIT について

アロハスピリットは、ハワイ語の ALOHA（アロハ）の 1 文字ごとの意味

「思いやり・協調・喜び・謙虚・忍耐」から象徴されるハワイの人々に受け継がれてきた「心の在り方」である。

A…人々の優しさ「アカハイ」 L…一つにまとめる大切さ、協調性「ローカヒ」

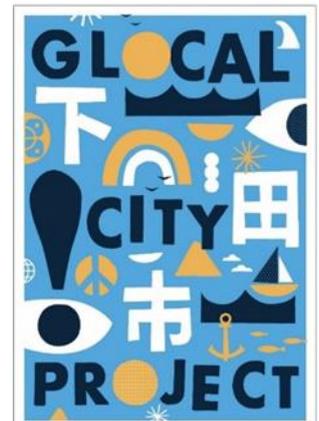
O…人々の思いやり「オルオル」 H…謙虚さ「ハアハア」

A…何事にも忍耐「アホヌイ」

ネイティブハワイアン達の労働哲学にも通じ、この5つがバランス良く調和していることで、日々の生活を豊かに、そして心身の健康へと導いてくれる、とされている。アロハスピリットのように、本市の皆が、海とともに、豊かに、健やかに生きていくための考え方を「シモダスピリット」として考案し、市民とともに確立し、共有していくようなことが、サーフシティ構想を支えていく市民運動として必要かもしれない。

下田市グローバル CITY プロジェクトとの運動も

下田市制施行 50 周年記念式典（令和 4 年 1 月）では、この節目の年を契機に新たな未来に向けた下田市の第 1 歩の取り組みとして、「下田市グローバル CITY プロジェクト開始宣言」を行い、国際性と地域性という本市が持つ 2 つの特性を活かし、様々なチャレンジを進めていくことを宣言している。



6) 基本構想の体系図・全体イメージ



下田市 SURF CITY 構想 (案)

背景

構想づくりの背景

- 日本のサーフィン界の発展に重要な役割を果たしてきた地域
- 2020東京オリンピック・パラリンピック大会ではサーフィン競技のホストタウンになった
- 美しい海と自然環境が、観光と交流の価値をつくっている
 - “世界一身近に楽しめる海” “世界一市民が誇れる海” の実現を目指している
- 下田市ならではの環境保全、自然との共生・防災対策
 - 環境と景観の基盤である森林と海岸線の保全、自然と共生した土地利用

現状と課題

下田市の現状と課題

- 人口・交流人口の減少に伴う産業と経済の縮小
 - 新たな息吹をもった持続可能なまちづくりの推進が求められる
- 観光に過度に偏る産業構造で、海の活用が季節型/イベント型/誘致型/外発型
 - 本来の素地を活かした通年型・内発型の事業化が求められる

◎まちづくりが目指すところは…

拠点や環境整備による魅力づくりと住み良さの向上
自然・環境・資源・人材をもっと誇ることができるまち

目的・位置づけ

(第5次下田市総合計画より)

【基本構想】

- まちづくりの基本理念
下田を愛する市民をはじめとする幅広い人の参加により 本市の持つ自然や歴史文化を活用し、市民一人ひとりが 誇りを持って暮らすことのできるまちづくり
- まちの将来像
時代の流れを力につなげる下田
新しい未来

サーフィンとその周辺領域が持つ価値をまちづくりに活かす

サーフィンを基軸としたライフスタイルの推奨、自然回帰型スポーツとしてのサーフィン環境の充実化、海辺の開放空間を活かしたサーフィン周辺のコンテンツ・プログラム・サービス開発など、まちの魅力の磨き上げに取り組む

【基本計画】

- 自然環境・生活環境
貴重な自然環境の保全/環境教育・環境学習の推進
- 子育て・教育
学校の教育内容の魅力化/マリンスポーツの大会や合宿誘致/総合型地域スポーツクラブの検討
- 観光・産業・雇用・移住促進
移住・定住の促進/ワーケーションの推進/農業・漁業の担い手確保/創業支援・新産業創出
- 健康・福祉
ライフステージに応じた健康づくりの推進/多世代交流の場を創出
- 共生社会
多文化共生・国際交流の推進

基本理念・方針

サーフィンが持つチカラを、下田のまちづくりへ積極的に活かそう

その1

サーフィンを通して海を守り、価値を繋ぎます

下田は“海が大切な財産”

その2

サーフィンがもつ可能性を、まちづくりに活かします

自然・健康・文化・環境・歴史・産業・人材に広く深く繋がる“サーフィンの魅力”

その3

みんなで関心を寄せ合い、オール下田で取り組みます

立場を超えて“下田の仲間たち”とともに

基本目標

■目標①

快適なサーフィンとビーチライフを実現するインフラ整備と環境保全活動の推進

- 快適なサーフィンを実現するための情報化とまちづくりへの参画
- 快適なビーチライフを実現するためのインフラ整備と環境保全活動の推進

■目標②

サーフィンを通じた下田の価値を高めるまちづくり・ライフスタイルの推進

- サーフィンを通じてグローバル&ローカルコミュニケーションを確立
- 多様な価値を持つサーフィンを通じて積極的にまちづくりに参画
- 「海」「波」「風」「浜」を活かしたライフスタイルの再認識と発信
- サーフィンをしない人も共感できるウェルネスの価値感を共有

■目標③

交流・関係人口拡大と移住定住促進、海の通年利用とサーフィン関連業との連携

- 美しい自然とともにある生活と海の通年活用の具現化
- サーフィン関連業と他分野事業との連携による新たな事業の創出

施策 (案)

- 下田市のサーフポイント7箇所の明確な情報発信
冊子作成/情報収集・研究・ルールの検討・整備/世界的大会の誘致と地域との交流プランづくり ほか
- 下田市におけるサーフィンに関するデータベース化
在住者 移住者 宿泊者の数値化/意識や行動の実態把握 ほか
- 快適なビーチ周辺の整備と景観や自然環境の保全活動
実態の正確な把握・情報収集 ほか

- 下田市の「海」「波」「風」「浜」を学ぶ機会・触れ合う場面の創出
副読本化・授業化/高校サーフィン部創部/アカデミーの創設 ほか
- サーフィンをアカデミックに捉えた学び場・ミュージアムづくり
公共や民間の施設や学校での期間展示/アートから海洋ゴミまで ほか
- サーフィンをテーマにしたメディアづくり
特設サイト/出版社アプローチ ほか
- サーフィンを通じた異文化コミュニケーションの推進
サーフィンと地域情報の多言語化 ほか
- サーフィンをしない人にも「ウェルネス」の価値感を共有
セミナー・ワークショップの開催 ほか

- サーフィンによる豊かな暮らし「生活地:下田」を実現
トークイベント、ワークショップ、フォーラム/サーフィンがテーマの移住・定住相談会/下田ブランドの商品化 ほか
- 観光業・サービス業とサーフィン関連業との連携
協働ビジネスの仕組みづくり ほか
- 自然とともにある仕事や農林水産業とサーファーとの連携
市・商工会議所・農協・漁協・森林組合等との連携活動 ほか

サーフィンの現状と課題

- 市内にサーフポイントが7箇所も存在する下田の海を、多くのサーファーがリスペクトしてくれている
 - 国内でも極めて水質が良い
 - 海と波と浜とその景観に多様性がある
- 地域住民と観光関係者は、未だにサーフィンに対する理解と期待が薄い
 - 過去のマイナスイメージが残り、地域住民との接点が少ない
 - サーファーは年間通してサーフィンに多額の支出をしている
- サーフィンは生涯スポーツであり、自然を活かしたライフスタイルであり、生業でもある
 - サーフィン等のマリンスポーツが、まちづくりに重要な「定住意向」「地域愛着」「幸福感」の創出につながり、移住・定住の一要因となっている (市民アンケートより)

◎サーフィンで関係人口を創出するには…

サーフィンを下田のライフスタイルの主流へ押し上げる
サーフィンが持つ力で生活と産業を連携し活性化させる

[構想の実現に向けて]

本構想は、本市が“オール下田”で、「サーフィンを活かしたまちづくり」を推進していくための第一歩として、その意思表示をするものとして策定した。

今後、構想を実現するために令和7年度に『サーフィンを活かしたまちづくり推進委員会（仮称）』を立ち上げるとともに、より具体的な事業計画については、本構想に基づいて策定を進め、推進体制を構築していく。

下田市サーフタウン構想策定委員会

- | | | |
|---------|-----------|-------------------------|
| ■委員長 | 酒井 厚志 | (公社) 日本サーフィン連盟 理事長 |
| ■副委員長 | 稲葉 一三雄 | 元下田市総合計画審議会 会長 |
| ■委員 | あん まくどなると | 上智大学地球環境学研究科 専任教授 |
| | 大野 修聖 | S.LEAGUE チェアマン |
| | 鈴木 直人 | (一社) マリンネット下田 理事 |
| | 鈴木 めぐみ | 下田市サーフタウン構想 策定作業部会 委員 |
| | 安藤 マリー | 下田市サーフタウン構想 策定作業部会 委員 |
| | 渡邊 一彦 | (一社) 下田市観光協会 会長 |
| | 田中 豊 | 下田商工会議所 会頭 |
| | 横山 秀美 | (公財) 下田市振興公社 理事長 |
| | 田中 治俊 | (NPO) 下田市体育協会 会長 |
| | 山梨 弘樹 | 下田市立下田中学校 校長 |
| | 山口 智史 | (NPO) 下田ライフセービングクラブ 理事長 |
| | 佐野 晃一 | まちづくりカジキサポートクラブ 会長 |
| | 土屋 尊司 | 宿泊業経営、イラストレーター |
| ■オブザーバー | 糸賀 浩 | 下田市 産業振興課長 |
| | 田中 秀志 | 下田市 観光交流課長 |
| | 平川 博巳 | 下田市 教育委員会 学校教育課長 |
| ■事務局 | 鈴木 浩之 | 下田市 企画課長 |
| | 金守 俊彦 | 下田市 企画課 課長補佐兼政策推進係長 |
| | 佐々木 豊仁 | 下田市 教育委員会 生涯学習課長 |
| | 坂部 琢 | 下田市 教育委員会 生涯学習課 社会教育係長 |